

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

時代を背負った船

佐藤 高彰

初めて「彼女」と会った時の印象は今でも覚えている。なんと大きく、プロポーションの美しかったことか。その時は、一人の老人の前かがみに歩く姿を思い出した。

「この船、本当にあのオジサンが作ったんやろか。」
福竜丸と私の出会いは今から4年前。和歌山在住の作家、徳田純宏さんの一言がきっかけだった。「あの福竜丸が和歌山で作られたって知ってますか。……恥かしながら私はそれが社会科で習った、あのビキニ事件の第五福竜丸であることに、しばらく気がつかなかった。」

福竜丸の前身、第7事代丸の設計者南藤藤夫さんに会ったのはそれからすぐだったと思う。和歌山県古座町の南藤造船所を訪ねた時、南藤さんがまだ現役で船を作っているのに、大変驚いた記憶がある。昭和37年生まれの私にとって、福竜丸事件はいわば歴史上の出来事だったのである。

をつかうんや。無細工な船より、べっぴんさんの方が乗る方も楽しみでないかい。……カナナがけをしながら、南藤さんはそう語った。船は女性、自分が作った船は娘、そんな彼のセリフが気に入った私は、彼の「長女」を追っかけることにした。

第7事代丸は彼が最初に作った漁船である。進水した昭和22年にはカツオの水揚げ日本一を記録。その6年後、船は焼津に売られ「第五福竜丸」と名前を変え、翌年、水爆実験に遭遇。昭和31年から東京水産大の練習船はやぶさ丸に改造。10年の航海のち廃船、夢の島へ……。全国的な保存運動が起きる。

南藤さんがこんな話をしてくれた。「船を作る仕事は子供を育てるのと一緒や。どこもこれも一人前にして船主に嫁に出すんや。」
南藤さんが手塩にかけた「娘」は、彼の知らないところで波乱に満ちた運命に生きた。そしてその航跡は、時代の匂いに満ち、戦後史の貴重な記録で

あることに気がついた。
先の大戦に南藤さんは従軍、インパール作戦に参加する。まさに九死に一生を得て日本に帰りつき、「一度死んだ身やから」と精一杯腕をふるったのが事代丸である。当時戦時中の徴用で漁船はほとんどなく、食糧難を救うべく、さらには日本復興の足がかりとして大型木造船が次々と作られる。事代丸もそんな期待を一身にうけ活躍する。しかし20年代後半、漁船がどんどん遠洋に出、鉄船が全盛になると、事代丸のような大型木造船の時代は終り、当時はまだマグロ漁後進の地であった焼津に新たな活躍の地を求めることとなる。それが不幸の航海の始まりであった……。

今年にはビキニ事件から35年。そして昭和という時代も終わった。そこで、NHK和歌山放送局では、郷土で生まれた船、第五福竜丸をこれまでの「平和を問う船」という視点とは別に、「時代を背負った船」として見つめる特集番組を制作している。波乱に富んだ船の運命を軸に、南藤さんをはじめ、それにかかわった人々の証言で構成するドキュメンタリーで、関西地区で9月下旬放送の予定である。御期待下さい。(NHK和歌山放送局制作部)

高校生の見学があいついで

「この答、どこにありますか」
夏休みの展示館は宿題のレポートにとりくむ高校生で占拠されます。いくつかの質問が設定されていて展示物をくまなく見ないと正解がない。事前に調査された先生の苦心の宿題で、「池田さんはその

長岡弘芳さんを偲ぶ



下保谷図書館の前で(一九八一年)

八月十四日、長岡弘芳さんが亡くなった。五七歳。原爆文献の研究者で「原爆民衆史」「原爆文学史」などの著書があるが、原爆文献を読む会などの中心として活動した。第五福竜丸の保存運動にも積極的に参加され、平和協会の当初からの賛助会員のひとりであった。

展示館には氏から寄贈された貴重な原水爆にかんする文献のひとりであった。
展示館にはまた、久保山すすきんから寄贈された約三千通の手紙類が大切に保管されているが、一九七三年、その整理にあたられたのが加納竜一、近藤弘氏と長岡さんであった。久保山愛吉さんの病床に祈りをこめて全国から届けられた手紙をひとつひとつ氏は読み、丁寧に分類されたと聞く。
大田洋子の再評価が氏の願いであった。

一九八三年には、大田洋子全集

時どう叫んだか「水爆の構造は」などなど。
都立大泉高校、都立大付属高校、埼玉県川口東高校などの二年生が四、五名の班を組んで来館、汗を流し、感想文のノートに「僕はヤッタゾー」などと書き記しました。海外からも高校生が来館、アメリカワシントン州の高校生十名が日

本赤十字社の招請で、全校で折ったという千羽鶴を抱えて来館。原水爆はいらないと声を詰まらせ「広島へも行ってきます」。
また、日本青年奉仕協会が八月九日から四日間、東京で開いた活動文化祭に参加したグループがフールドワークで展示館を見学。北海道、新潟、福島、広島などの
(全四巻・三一書房)の編集にも携わった。
第五福竜丸被災後の一九五六年三月一日、大田洋子が『新潮』に発表した「半放浪」についての解説など鋭い指摘もある。
二年前、手渡しメッセージとして、反核はがき、詩歌集、ミニ色紙・短冊の普及を訴えられた。色紙は、一枚一枚手作りで野草の押花をつけ、短歌を楊子で書いた見事なものだった。
最後にお会いしたのは、昨年松本楼での協会設立記念祝賀会であった。
ハンチングにタイトルネック、痩身だが、背筋を伸ばして飄然と表れた姿が今も目に残っている。
長岡さんは、心やさしい人だった。

高校生約二十人で、「今年のテーマは、地球人になるうで、この実習は、国境を超える」という課題の一つ。第五福竜丸に平和の尊さがあるべき姿を考えます」と話しました。九月になっても、五日、目黒区のトキワ松学園の女子高校生約三百人が見学。「今年もこんなに実験があったの」と原水爆実験の大きなパネルの実験回数を一つ一つ数え、一七四二回(八十七年まで)に「フウ」とためいき。
原爆忌俳句大会―協会も後援
八月六日、第二十回原爆忌東京俳句大会が平和協会も後援して、日本教育会館で開かれました。広島への原爆投下から四十四年目のその日、全国から一、五四句の、核兵器廃絶と世界の平和を希う俳句を結集、東京都知事賞など顕彰が行われました。平和協会賞には、吉川義弘さんの、
八月がどすんどすんと歩いてくる、
が選ばれました。
ごろり昼寝ごろり水爆横にいる、
これは全国俳誌協会賞に選ばれた神朝人さんの作品です。
九・二三には久保山忌句会
九月二三日には、第九回久保山忌句会が、平和協会も協賛して江東区文化センターで午後一時から開かれます。

平和随想 (32)

三宅 泰雄



私の無二の親友の一人であった三井再男氏が最近亡くなりました。彼は東大理学部化学科における私の同期生でしたが、高校(旧制)の出身者ではなく、海軍から派遣されていた委託学生(将校)でした。卒業後は艦政本部につとめ、兵器の開発・整備・補給等の業務を担当していました。化学専攻でしたから、専ら、爆発兵器に関する業務の責任者だったようです。彼は世界大戦が始まる前に、外国の専門雑誌等で、オットー・ハーンたちによる原子核分裂の発見に関する報告を読み、その概要は理解していたようです。

そして、この新発見の現象は、いつか必ず兵器化されるに違いない、との見通しを持っていました。

た。しかし、日本では無理としても、ことによるとアメリカなら出来るのではないかと、漠然たる予想を立てていました。また、万一、原子兵器が実現して、実戦に使われたとき、周章狼狽することがないように、防衛対策くらいは準備しておいたほうがよからうと考えました。

三井さんは、その考えを上司に具申し、原爆の可能性については、しらべておこうと提案しました。上司も三井さんの意見に賛成し、「原子爆弾の可能性」をテーマに、京大荒勝文策教授に研究を依頼しました。研究費は六〇〇〇円でした。

三井さんは終戦の直前に、呉の海軍工廠に転動していました。呉は広島島の南東二〇キロのところにある軍港でした。

一九四五年八月六日午前八時十五分、朝の仕事にとりかかったとき、部屋の中がピカッと、異常に明るく輝きました。三井さんは、変電所の故障かと思い、窓を開けてみました。まさか、変電所は無事でした。まもなく大爆音が聞こえてきました。

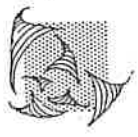
彼はすぐ、丘の上に駆け上って見ましたところ、広島方面はもうもうとした火焰の中にありました。彼は、即座に、もし爆薬だとしたら、数百トンから数千トン規模だと判定しました。火焰の中は広島市全体の中とほぼ同じくらいでした。そのとき三井さんは、火焰のところどころに、ストロンチウムの焰色反応に似た鮮明な赤色焰のあふることに気がきました。彼はそれを核分裂のさいにできるストロンチウムではないかと推察しました。そこで彼は、とっさにその火焰は爆薬ではなく原爆と判断し、五人の技術将校を広島に緊急派遣しました。

翌日、三井さんは自分が広島に行き、ガイガー・ミュラー・カウンタが海軍病院にあることを知り、環境の放射能をはかったところ、その余りの強さに驚きました。

九日には、陸海軍と科学者による協議会が開かれました。仁科芳雄・荒勝文策博士らも出席していました。そのときでさえ、まだ「原爆などできるはずがない」と主張する人が何人かいました。三井さんは断固として、「これは間違いない原爆だ。お互いに無駄な議

論は止めよう」と、反対論者の意見を封じました。一方、アメリカ側は、ラジオの国際放送で、広島への原爆投下を報じ「わが方は、なお百個の原爆を保有している」と宣伝していました。

しかし実際は、アメリカが作った原爆は三個(プルトニウム二、ウラン一)でした。うち一個のプルトニウム爆弾は七月十七日にアラモゴードで試験爆発をしたので、のこりは二個だけだったので、プルトニウムの方は実験済みでしたが、ウラン爆弾については、果たして爆発するかどうか、専門家の間でも議論が分れていました。いいかえれば、広島はウラン爆弾の実験場として使われたのでした。私は広島島の原爆を、科学的に認定した最初の人は三井さんその人であったと信じています。三井さんは戦後キャノンに入社し、アメリカにも長く滞在していました。その後はキャノンの顧問として、技術指導に当たっていたと聞いています。



焼津を訪れて

久保 佳子

先日、急に思い立って主人と二人で焼津を訪れました。第五福竜丸のふるさとという思いにかられて。

改札口を出て、案内所で第五福竜丸について尋ねました。そこで「焼津歴史民俗資料館」を教えてくださいました。人口十一万余の焼津市は、街並もゆったりと落ち着き、明るく、大都会の雑踏になれている者にとって気安さを感じられました。

タクシーで運ばれた文化センターは、モダンで、堂々とした「殿堂」で、焼津市のおそよの顔といた感じでした。センターの一階は図書館、二階は歴史民俗資料館となっていました。

焼津は漁業を基盤とした都市ですが、気候温暖で、古代からの住民の遺跡、文化財が多く残されています。広さ三百平方メートル余の館内は整備され、縄文、弥生、奈良、平安と時代別の発掘品、古墳、民具等が展示されていました。

これらには興味をひくものも多数ありました。

奥の一角に、焼津を愛し、しばしば滞在中にしていた小泉八雲(ラファディオ・ハーン)の遺品類、書簡などが展示されていました。紋服姿の小泉八雲とセツ夫人の等身大の写真も展示され、その前でしばし、足を止めました。

その右手奥に「第五福竜丸コーナー」の入口がありました。広さは二〇平方メートルくらい。長方形のこじんまりとした部屋で、壁一面に焼津市の全景が、港を中心として、明るい写真が掲げられ、その前に三メートルくらいの大きさの第五福竜丸の模型が置かれていました。夢の島の展示館にある第五福竜丸とは違い、この新造船の模型は、美しく、輝いて見えました。

入口からの正面に「核兵器廃絶を願う焼津宣言」(一九八五年六月十九日焼津市議会決議文)が、一メートル平方くらいの大理石の

板に金文字で次のように記されていました。「昭和二十九年第五福竜丸被爆以来三十年経過した今日、米ソ両国が核兵器削減の交渉の場についたことは本市にとってまことに喜ばしく、『第五福竜丸コーナー』の新設を機に敬虔な思いをこめて、将来にわたる核兵器の廃絶への決意を宣言するものである」。

壁面には第五福竜丸事件の年譜写真入りの船歴が記され、当時の「公文書」や、当時活躍したガイガー計数管が保管されています。無線局長の久保山愛吉さんが用いていた無線機がガラス箱に収められていました。このほかに、入院中の久保山さんのご家族宛の手紙が何通か展示され、久保山さんの優しいお人柄に、涙がこぼれました。

その手紙の一つ、次女、安子ちゃんへ
「一年生になっておめでとう。とちう、みちくさをしないで、あめふりに、かわへおちないように、お母さんのことをよくきいて、べんきょうしなさい。さよ子をなかせては駄目。安子へ、おとうちゃん」
丁寧な字で書かれてあり、父親

の愛情があふれ、深い悲しみを覚えました。

また、掲示されている久保山さんの最後の言葉には、胸をえぐられる思いがしました。

「文明が進み、原子エネルギーの時代がきた。我が身をもって不安と苦痛を受けた。皆様には、味あわせたくない。侵略とは強力な軍隊のみならず、放射能汚染も侵略である。私は平和を愛する。福竜丸時代がなつかしい。」

帰りに「第五福竜丸事件」という分厚い本を求めました。これは二十年間倉庫にあった資料を整理、編集し、市制二十五周年記念として市当局が出版したものです(一九七六年)。この書はどのページを開いても、尊い歴史的証言が迫ってくる感に打たれました。

東京の第五福竜丸展示館を訪れる皆様方も、是非、一度焼津市の歴史民俗資料館の第五福竜丸コーナーをごらん頂きたいと思えます。(横須賀市在住)

